

カルチャー・ショック 日本人のみた外国



2007年夏、バラナシの路上にて通りすがりのインド人(左)と筆者(右)

インドは一度行くと、「ハマる人」と「ムリな人」の二つに分かれる、とはよく聞く話だ。二年前の夏、近くインドへ行くという友人の話聞き、私も軽いノリで着いていくことにした。

私は綿密な計画を立てずにノリで遠出をすることが多い。例えば、ある朝起きて無性に餃子が食べたくなったので、「せっかくだらなく食べるなら宇都宮へ行かなあかん！」と自分との数秒間の相談の末、自転車で宇都宮へ餃子を食べに行ったり、またあるときには大親友と「二〇代のうちに太平洋ベルトを歩かなあかん！」という話になり、とりあえず一週間かけて東京→浜松を歩いてみたりといった感じだ。このときのインドも例外ではなかった。

突然迎えた私のインド旅行は最悪の幕開けであった。インド・デリーの地に降り立つと、異様な雰囲気私を包み込んだ。私はバラナシ行きの鉄道チケットを手に入れるべく、自分の背中より大きなバックパックを背負いデリー駅の外国人専用窓口を探し始めた。次の瞬間、私はたくさんのインド人に囲まれていた。その中に政府観光庁のIDカードを持つ男がいた。「チケットはDTTTCのオフィスでしか買えない。そこまではリキシャーで行け」。その男の

大阪人とインド人

安藤裕二

主張する内容は、私の持っていたガイドブックのものは全く異なり、そのことを指摘すると、「チェンジ」と言い、ガイドブックのページに大きく「×」を描いた。こいつは信用できないと思いついて逃げると、次は俺だと言わんばかりにタクシーの運転手や旅行会社の男など私は次々と引っ張られ、それぞれが違う内容を主張する。やっとのことで外国人専用窓口を探し当て、チケットを手にしたときには駅到着からすでに三時間も経っていた。

デリーにて半泣きにされた私がインドに親しみを感じ始めたのは、ガンジス河の街「バラナシ」でのことである。バラナシには日本人バックパッカーが多く、情報を共有できた。何よりもガンジス河での時の流れは、意外に急な河の流れとは異なり、非常に落ち着いており、ゆっくりとインドを味わうことができた。その時間は、インドを通して日本や自分自身を見つめ直すきっかけを与えてくれた。海外へ行くといつも「日本人」としてのアイデンティティを感じるが、インドでは何故か「大阪人」としてのプライドも同時に感じた。それは、まさに漫才のように全てを笑いに変えるという意地である。大阪人根性を思い出した次の瞬間、ガンジス河の河川敷で伸びた髪の毛を

切り、大阪人のスイッチをオンに切り替えた。大阪人の強みが最も発揮されたのは、値切りの場面であった。お互い拙い英語で自己主張をし、抱きつき作戦や変顔作戦なども繰り出した。あほなことを繰り返し、次第に彼らに親近感を覚えた私は、とんでもない一言を口にした。

「Hey, brother! Japan and India, very close family, you know?」

彼らが私に「Brother!」なり、「Japan and India, very close family」と言ってきたものだから、逆に私はそれらを拝借して自分なりの決め台詞を作り上げていた。ハイテンションで彼らに接すると、彼らもそれに応じてくれるのである。初めはとっつきにくかったインド人は、次第に私とキャラの似た同朋に思えてきたのである。それは大阪人の多くが持ち合わせる「人懐っこさ」と「ボケとツッコミの精神」を、インド人も持っていると感じたからである。こうしてノリでやって来たインドで彼らとの共通点を発見し、ハマってしまったのだ。そんな彼らと漫才コンビを組んだらうまくいくかもしれない。そのときのコンビ名はシンプルに「大阪人とインド人」がいい。

(あんど、ゆうじ/アジア経済研究所 企画部)